

31 高野六郎——衛生行政の専門性に関する考え方

の形成をめぐって——

横田陽子

立命館大学大学院先端総合学術研究所

発表者は昨年の本学会で、戦前昭和期の衛生技術官の専門性をめぐる動きを報告した。この動きは、衛生技術官がその専門性を向上させる契機になったと考えられ、現在の公衆衛生の専門性のあり方を考える上でも重要である。この衛生技術官の動きを主導したのは、衛生史において厚生省予防局長として戦前日本の優生政策を統括した人物として知られる高野六郎（一八八四—一九六〇）であった。基礎医学者であった高野が、衛生行政の専門性に注目する素地はどこにあったのか。米国での体験や見聞およびそれらに対する考えを、留学体験記からみる。

高野は一九一七（大正六）年から一九一九（大正八）年まで主にアメリカ合衆国に留学し、その体験記が

『医海時報』に一九一八（大正七）年一月十二日発行の第一二二九号から、帰国後の一九二〇（大正九）年五月八日発行の第二三五〇号まで掲載された。

高野は一九〇九（明治四二）年東京帝国大学医学部卒業。一九一〇（明治四三）年伝染病研究所に入るが、一九一四（大正三）年に同研究所の内務省から文部省への移管に抗議して退職した北里柴三郎に伴い退職、北里研究所の創設に参画。一九一八（大正七）年、京都大学から医学博士号取得。帰国後慶応義塾大学医学部教授を経て、一九二三（大正一二）年から一九四二（昭和一七）年まで、内務省衛生局予防課長や厚生省予防局長を務める。その後日本医療団理事、北里研究所所長などを務めた。

高野は、米国各地の医科大学などの微生物学、衛生学関係の研究者を訪問、コロンビア、コーネル両大学の各医科に「一学期間出入り」、最終的に「実験医学の覇者を以て任じる」ロックフェラー研究所に落ち着き、その後ヨーロッパを経て帰国した。

米国の医学は日本のそれに比し必ずしも優れるとは

思えないが、科学知識の応用面は日本を凌ぎ、莫大な資金で将来全世界を凌駕するのではと考えた。また研究環境にも関心をもち、「インデックスメディアカス」の由来、米国の医学図書館制度などを紹介した。研究者としての鋭い眼差しは野口英世にも向けられ、従来ヒト以外に感染しないとされていた黄熱の、動物実験による「スピロヘーテ」病因説に対し、証明の手順を踏んでいないとして疑義をはさむ。従来の日本の衛生学のあり方について、その舶来主義を批判し、実際応用面で役に立たないとしている。

日本の便所批判は随所にある。衛生学の講義を見学した際、東京銀座の汲取り風景が幻燈で紹介され恐縮した話や、パリの下水道を見学し、東京も世界の大都市を自認するなら臭くない都会であってほしいと感想を述べ、これは単に衛生問題に止まらない、としている。ジョンズホプキンス大学の衛生官養成学校を紹介し、創設直後で見える程のことはなく、学校は未知数だとしながら、米国の衛生官教育は有識者の意図するところだとしている。衛生に関する言及は記事数で五分

の一に含まれるが、それは主に医師としての関心からであった。

ロックフェラー財団の事業概要やその援助規模の大きさを紹介。また同財団やロックフェラー研究所、他の医学校などの、第一次世界大戦下の軍事協力も紹介している。さらに米国のユージェニクスを含めた社会改良運動を、「社会改良の流れが思想界に充満して居る」として紹介している。禁酒運動の「成功」は、医学者と社会改良運動者の役割分担がうまくいき、知識の普及が徹底したからだとしている。

留学中の高野の関心の中心は、研究環境を含めた微生物学など基礎医学研究にあり、特に衛生行政に興味を寄せるものではなかった。しかし留学中は、応用重視の米国の学問観に触れ、その社会への適用を見聞し、衛生学者との交流があった。このような米国での体験が、帰国後の方向を決め、とくに衛生行政の専門性に対する考えを形成するようになったのか、今後さらに検討していきたい。